

# ニュースレター 事業短信

from AIKOH

2017(平成 29)年 9 月 19 日 (火) No.141

<発信者> 社会福祉法人愛光理事長・法澤奉典  
043・484・6391(本部) / 043・484・6571(理事長室直通)  
(URL) <http://www.rc-aikoh.or.jp/>  
(Eメール) [mail@rc-aikoh.or.jp](mailto:mail@rc-aikoh.or.jp)

## CONTENTS (今月号の内容)

- \* 日誌抄録 (1頁) : (2017年8月1日～)
- \* おもな動き (2頁) :
  - ・グループホーム「山王の家」竣工
  - ・地域向け秋のイベント ほか
  - ・職員状況 (2017年8月中)
- \* 現場の内外で (3頁) :
  - ・9月になって
  - ・「一人暮らし」の決意
- \* 情報&ニュース (4頁) :
  - ・「第3の転換期」
  - ・映画『もうろうをいきる』
- \* マイタウン (5頁) :
  - ・「先生」と呼ばれてテレる高校生
  - ・不審車居すわる
  - ・ある日の「ちょっといい話」
- \* 三代目燈台守 (6頁) :
  - 読書ノートから (天童荒太『悼む人』)

## ▽日誌抄録 (2017. 8. 1～)

月/日 (曜)	記事
8/4 (金)	後援会・愛の灯台基金役員会(本部第1会議室)
6 (日)	広島原爆忌
7 (月)	立秋
9 (水)	サービス管理責任者会議(本部第1会議室) / 長崎原爆忌
15 (火)	終戦記念日
17 (木)	施設長会(本部第1会議室) / 執行理事会(本部役員室)
24 (木)	執行理事会(本部役員室)
28 (月)	職員研修会(実践発表基礎研修:本部第1会議室)
30 (水)	執行理事会(本部役員室)
31 (木)	制度改革フォローアップ研修(経営協主催:千葉市)
9/1 (金)	防災の日
6 (水)	愛光・千視協 グループ法人協議会(視障センター)
14 (木)	全国社会福祉法人経営者協議会(経営協)全国大会(～15:四日市市)
16 (土)	理事会(本部第1会議室)
18 (月)	敬老の日

物騒なニュースも流れてくる国際情勢と同様、気候も不穏のうちに推移しています。9月に入って新学期も始まったと思ったら、お隣の根郷中学校からは時ならぬ歓声が聞こえてきました。“これから青春”という中学生のはちきれそうなエネルギーの爆発は、秋の恒例行事・運動会の練習でした。夏休みを終えてさっそく運動会とは、不安を抱えて登校してくる生徒たちが、久しぶりの学校生活に円滑に戻れるようにという、学校側の工夫かなと、教育現場の抱える悩みももうかがえます。

## ▽おもな動き

### グループホーム「山王の家」竣工

かねてより建築工事を進めておりました障害者グループホーム「山王の家」(佐倉市太田1879-1)がこのほど竣工いたしました。入居を予定されている皆さんは、11月のオープンの日を指折り数えて心待ちにしていらっしゃると思います。生活圏域は山王地区の住民の方がたと共有することになります。近隣の皆様、よろしくお願い申し上げます。

### 地域向けイベント

1年中でもっとも過ごしやすいこの季節には、収穫を祝うお祭りや各種イベントも多彩に行われます。「愛光秋まつり」と「わくワークちばてんフェスタ」のご案内をいたします。なお『ちばてんフェスタ』は今年から社会福祉法人千葉県視覚障害者福祉協会の主催行事となりました。

#### ●愛光秋まつり

- 開催日：10月14日(土曜日) 11:00～15:30
- 会場：社会福祉法人愛光本部敷地内(佐倉市山王)
- 催し物：模擬店・アトラクション(清丸太鼓/よさこいソーラン/大抽選会など)

#### ●わくワークちばてんフェスタ

- 開催日：10月27日(金) 10:30～15:30・28日(土) 10:00～15:30
- 会場：視覚障害者総合支援センターちば(千葉点字図書館：四街道市四街道)
- 催し物：文化講演会/見えない・見えにくい方のためのメイクセミナー(27日)  
バリアフリー映画会『クィール』/チャレンジド・ヨガ/盲導犬体験(28日)

### 年報No.23(2016年度版)

10月1日発行予定です。ご希望の方は総務部・川上まで(愛光総務部：043-484-6391)。

### ■訃報

元はちす苑施設サービス課長の島本和代さんが、8月17日永眠されました。はちす苑開設時(1999年10月)のスタッフの一人で、法人における高齢者介護事業の草創期の中心的役割を果たされました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

<b>■職員状況</b> (2017年8月中)	*採用：9(正職1/パート・アルバイト8) *退職：0 *2017年8月31日現在：職員現員 <u>365人</u> (正職159/サポート又は常勤嘱託39/パート又は非常勤嘱託167) *育児休業：2(めいわ1・ルミエール1) *休職：1
----------------------------	--

## ▽現場の内外で

### 9月になって

夏休みを終え、多くの学校が始まるこの日は、不安を抱えている18歳以下の自殺者が最も多い日と言われている。学童保育の現場を預かる私たちも、子どもたちの仲間関係の変化や家庭環境、親子関係に不安を抱えてはいないかと気になる。夏休みの終盤になるにつれてこの思いはことさらつのる。幸い、7か所の管轄する事業所を利用する学童のすべてが元気に登校し、学校生活中心の毎日に移行していった。

こうしてほっとして迎えた9月1日だったが、学校の夏休み期間は学童保育所にとっては特別な時期である。利用する学童も職員も普段より増え、それだけリスクも大きくなる。

例えば、スポーツゲーム中に接触して目に手の指が入る、ともだちの体にペンで落書きをした、裁縫の活動時間に他の子を針で刺した、2階から階下をめがけてボールを投げた、などである。それぞれ当事者から聞き取りをすると、所内の混み具合が原因だったり、ちょっと驚かせようと思って…、何の気なしに…、といった事情がわかった。心配した「いじめ」などではなかったが、遊んでいるときの周りとの間隔やその行為による危険性の予測、他の利用者への気づかいの必要を言い聞かせ、当事者たちと共有することができた。

小学生時代の夏休みを思い出せば、その間の過ごし方の中心は「遊び」だった。学童保育所のプログラムも「遊び」の企画に重点が置かれる。水遊び、虫捕りなどの外遊び、室内ではレゴブロック、カードゲームや室内ゲーム…。「近ごろの子どもはテレビゲームしかやらない」といった見方もあるようだが、けっしてそんなことはない。汗だくで熱中する子どもたちの姿は今も変わらない。独自のイベント（お化け屋敷、怖いお話会縁日、各種の創作・体験活動など）にも多くの学童が喜んで参加していた。

「また来年もやるの?」「もっとやって!」「今度いつやる?」…。

子どもたちの感想でした。

(2017年8月・学童保育所月報より)

### 「一人暮らし」の決意

グループホーム「ジョーの家」の一室を「一人暮らし体験」の場として提供している。

実家では家事や日用品の買物から通院まで一切を母親に頼っていたが、ワークショップかぶらぎに通うようになって「普通になりたい」という想いが強くなったBさん。じゃあ一人暮らしにチャレンジしてみてもいいということになった。

実家ではほぼ毎晩のように愁訴\*が続いていた。ところが体験生活を始めると、不思議なことに起きなかった。理由は「訴える相手がいないから」だという。体験生活終了後もBさんは実家に戻らず、アパートで一人暮らしを始めようことを決意した。費用面での支援を依頼された両親もその申し出を承諾し、次のように言った。

「親には親の生活がある。あなたはあなたの生活を作りなさい。」

この話し合いの後、Bさんの愁訴に何年も付き合ってきた両親は

「かぶらぎを利用し始めた1年前と比べると今の状況は想像もできません」

と感きわまった様子で話されていた。

不登校や拒食に陥った学齢期は、支援機関などに頼るより母親が抱え込むしか方法がない状態であったことは想像に難くない。ただ、そのまま10年、20年と時が経った場合、家族だけでその関係にメスを入れることは難しい。家族関係に対しその姿を客観視できる鏡を持ち込むことは支援機関の役割だと感じる。

\*【愁訴】患者が辛い事情を嘆き訴えること。

(2017年8月・ワークショップかぶらぎ月報より)

## ▽情報&ニュース

### 「第3の転換期」

8月から介護サービスの負担割合が増えました。所得制限はあるものの、深刻な財源不足を背景に、社会保障制度は大きな曲がり角に来ていることは間違いありません。

わが国の社会保障制度は1961年の「国民皆保険・皆年金」制度のスタートで最初の転換を果たしました。そして2000年の介護保険制度発足が第2の転換期でした。その制度が10年を経過したあたりから暗雲が広がり始めました。

少子・高齢化に加えて人口減を迎え、さらに財源と働き手の不足、そして地域や人びとの暮らし方の変容から、「これまでの福祉の考え方では対応できなくなるのは明らかだ」（2017年8月21日、毎日新聞社説）と、「第3の転換期」が不可避であると言っています。

独居高齢者の増加、うつ、ひきこもり、アルコール依存、子どもの貧困や虐待などの問題に対して、かつて家族や地域社会が担っていた機能を公的福祉サービスで代替できないことも明らかになっています。

厚生労働省は一昨年「新福祉ビジョン」を提言し、昨年「地域力強化検討会」を省内に設置し、「我が事」「丸ごと」をキーワードに議論をすすめていましたが、近くその提言が示される予定だそうです。その内容は毎日新聞社説によりますと、「すべての人々が地域に主体的に参加することを柱として」、「福祉の『受けて』と『支え手』を固定せず、高齢者も障害者も支える側に回ることで、商業・サービス業・農林水産業など分野を越えて地域経済や支え合いに参画する」ことが打ち出されています。

そして提言のもう一つの柱がこれまでも示されてきた「縦割りの福祉ではなく、地域の課題を『丸ごと』受けとめる体制を作っていくこと」です。

この社会保障の「第3の転換期」に対応する経営戦略の構築がわれわれの取り組むべき課題であることは、いよいよ明らかになってきました。

### 映画『もうろうをいきる』

ヘレン・ケラーがこんな言葉を遺しているそうです。

「人生は恐れを知らぬ冒険か、それとも無か。そのどちらかである」

見えない、聞こえないというハンディキャップから話すことができるようになる感動の記録は、映画や舞台で有名な『奇跡の人』で再現されています。ヘレン・ケラーのような、見えない、聞こえないという重複障害のことを「盲ろう」と呼んでいます。推計で約1万4000人いるとされていますが、その当事者でもある福島智さん（東京大学先端科学研究センター教授）などの活動によって、少しずつ知られるところとなっています。

毎日新聞「余録」欄（2017年8月13日）では、この「盲ろう者」をとりあげた映画が紹介されていました。

「『宇宙の中にひとり取り残された感覚』『1日が40時間にも50時間にも思える』。そんな人々の暮らしを追ったドキュメンタリー映画『もうろうをいきる』（西原孝生監督）が今月26日、東京・ポレポレ東中野を皮切りに全国で順次公開される／佐渡でひとり暮らしをする女性、震災と津波に遭った石巻で生きる男性、柔道を続けながら結婚をするために自立を目指す広島青年。まったく見えず聞こえない人もいる／家族の世話や福祉で守られているだけではない。その暮らしは実に多様だ。『指点字（ゆびてんじ）』『触手話（しょくしゅわ）』などコミュニケーションを使って周囲との豊かな人間関係を紡いでいる。それぞれが『恐れを知らぬ冒険』の人生を歩んでいる」

この映画は各地での自主上映会方式で公開されるようです。機会があればぜひご覧ください。

## ▽マイタウン

### 「先生」と呼ばれてテレる高校生

「先生～、見て～！」と言われて照れているのは高校生のSさん。夏休み中の南部児童センターには、高校生、大学生 22 名のボランティアが、たくさんの来館者とあそぶ姿が毎日のように見られた。

学校が夏休みの期間には、毎日 100 名前後の来館者がある。9時から17時まで、ほぼ毎日来館する小中高生の“常連さん”十数名はインストラクターとの1対1のあそびを好む傾向にある。日々3～4人のインストラクターが出勤しているが、子どもたちの満足度を満たすことができるような対応がしきれていないのが現状である。

学生ボランティアは、年齢が近いせいか、すぐに仲良くなり、ボランティアの周りには子どもたちが集まり、あそび始める。高校生が、小学生にこま回しを教わる場面があるなど、いつの間にか子ども達が集団化して遊びの輪が広がってくる。同学年の友だちとは、なかなか交われなかった“常連さん”たちも、夏休みの終わり頃には異なる年齢のグループの中で、関わり合い、認め合い、時にはけんかもしながら、一段と成長した姿が見られた。間違いなく子どもたちにとっては、高校生ボランティアは「先生」になったようだ。

(2017年8月・南部児童センター月報より)

### 不審車居すわる

8月初旬から1台の軽自動車、来客用駐車場で不審な動きをしているのに気付いた。利用者がいない時間にも駐車している。車の持ち主らしい人物は、時に酒に酔って車の傍で寝ていたり、窓から足を出していたりしていた。たまりかねて職員が、「利用者のための駐車場であるから」と告げ、車の移動を促した。

それでも応じようとする気配はなく、警察にも相談しながら、巡回の回数を増やすなど配慮しながら、特に高齢者や子供の利用者の安全確保に努めた。調べてもらおうと無車検・無保険車だとわかったが、車の中もタバコの焦げ跡が丸い穴になって、いくつもシートに付着していた。日にちの経過と共にバッテリーが上がり、やがて窓も空いたままになり、車内も荒れて酷くなっていき、私たちは利用者への影響への危惧がますます募っていった。

その「不審車」が立ち去るまでのひと月は心を悩まされたが、利用者への被害がなく、本当にほっとした。

(2017年8月・南部地域福祉センター月報より)

### ある日の「ちょっといい話」

山王の街路を歩いていると、

「ねえ、ねえ」

と子どもの呼ぶ声。小学校3、4年生くらいの男の子が私を呼び止めました。

「あそこでね、工事をしていて道があぶないよ」

「通れないの？」

「だいじょうぶ」

「ありがとう」

それから数十メートル進むと、道路沿いの住宅の解体工事に出会いました。道路の右側に工事車両や資材などがはみ出している様子でした。道幅の4分の3くらいは確保されていましたので、危険な目に遭うことなく通り抜けることができました。

白いつえを携行している私に、いちはやく注意を促してくれた少年の心遣いに、その日はいい気分ですごすことができました。

読書ノートから（天童荒太『悼む人』）

今月は私の読書ノートから。取り上げる本は天童荒太（てんどうあらた）著『悼む人』（2008年、文藝春秋）。単行本で456頁、文庫本で上下巻688頁という長編小説である。

人の死生観について、という重いテーマの小説ではないかと敬遠されそうだが、著者の直木賞受賞作であり、けっして難解な純文学ではない。早速あらすじから。

物語は女子高生が同級生に刺される場面から始まる。数年後、その殺人現場に坂築静人（さかつきしずと）という青年が現れる場面がプロローグ。殺人・事故・病気・自殺と、人の亡くなった現場を行脚し、彼は追悼していく。左ひざをつき、右手を宙に挙げ、左手を地面すれすれに下ろして、それぞれの場所を流れている風を自分の胸に運ぶようにして両手を重ねて頭を垂れて目を閉じる…。それが彼の「悼み」のポーズであった。

なぜ彼は追悼の旅を続けるのか。その終わりなき旅路を追っていくストーリーなのだが、求道者のようにストイックに生きる静人の道程には深く関わる人物がいる。一人は、父母の離婚をきっかけに、父を憎み、妻子とも別れ、すさんだ心のままに、事件を興味本位に記事にしているフリーライター・薪野抗太郎（まきのこうたろう）。そして自殺願望の夫を殺してしまって服役し、自らも死に場所を求める女性・奈儀倭世（なぎゆきよ）。彼女は物語の後半で静人の同行者となる。そしてもう一人は、行先も告げずに旅に出た息子の帰りを待つ母・坂築巡子（さかつきじゅんこ）。彼女は末期の胃がんで余命を告げられ、前向きにそれを受け入れようとしている人である。この抗太郎、倭世、巡子の三人は、それぞれの生と死の狭間で静人と交流し、最初はただ奇異な行動をいぶかしく思い、理解できず、受け入れられない。だがそれぞれ自分の運命と向き合いながら、やがて静人と精神的な一体感を得る境地に至る。

人の死を悼むこと、ましてや報道で知る自分とは関係のない他人の不幸に対して祈り

を捧げる静人の行動から、われわれは死者を「悼む」とはどういうことかと考えてしまう。震災や大きな事件の犠牲者への追悼は、いわば「共感としての追悼」。身近な人の追悼は、「実感を込めた追悼」という違いがあるように思う。

著者が本書を書くきっかけになったのは、あの「9.11」だったという。その追悼集会では、犠牲者一人ひとりの名前が呼び上げられていたのが印象的だった。それに対して、中東地域のテロや空爆の犠牲者はただ単に数字で伝えられるだけだった。人の命の価値に軽重はないといいながら、そのあつかいの違いからは、私も何か理不尽ささえ感じたものだった。人の死を悼むとは、生きていたその人の人となりを理解してこそ、心からの追悼となる。そういう意味では、1年前の相模原の施設での犠牲者も「19人」という数字のみが伝えられ、どのような人であったかもわからずに悼んでいる。

「亡くなった方は、だれに愛されていたでしょうか。だれを愛していたでしょうか。どんなことをして、人に感謝されたことがあったでしょうか」

静人は悼みの現場で、故人を知る人にこう問いかけている。どのような死に方をしたか、ではない。どのような意味のある生を終えたか、という問いである。

そして話は多少因縁めくが、私が本書を読み進めていたちょうどそのときに、身近な人の不慮の死に遭遇した。あまりに衝撃的な不幸な出来事に言葉を失い、どんなことばで悼むべきかとあれこれ思いを巡らしていた。そんな私の杞憂を救ってくれたのは、ある人の次の一言だった。

「あなたのことをけっして忘れません」  
（法澤 奉典・のりざわ ともり）